

児童生徒どうしのつながりを育む教育相談的なかかわり

～指導の振り返りを通して～

学校教育相談研究会議

研究員 近藤 睦子（川崎市立梶ヶ谷小学校） 関根 智尋（川崎市立久地小学校）
中澤 英之（川崎市立南菅中学校） 西田恵実香（川崎市立住吉中学校）
指導主事 中島 智美 松田 典英

I 主題設定の理由

文部科学省が本年度10月に発表した「平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」では、いじめの認知件数や不登校児童生徒数が過去最多となっており、その状況は川崎市も同様で、これらは学校教育における喫緊の課題となっている。また、これら課題に対しては未然防止が重要であることがこれまでの研究から分かっている。

未然防止には、学校において児童生徒が多く時間を費やす授業の在り方が果たす役割は大きい。児童生徒は授業の中で、教師が授業で何を見て、何に耳を傾けているのかを一つのモデルとして、人とかかわり方を学び、自己指導能力¹を形成していく。小学校及び中学校学習指導要領総則解説には「教師の意識しない言動や価値観が、児童（生徒）に感化を及ぼすこともあり、この見えない部分での教師と児童（生徒）との人間関係にも十分配慮する必要がある。」とあり、教師は授業において、学習課題だけでなく、自分自身の言動や価値観にも意識を向け、児童生徒との関係性に影響を与えているという自覚をもつ必要がある。

そこで、本研究では、授業を中心に、指導の中で、教師は児童生徒の姿からどのようなことを感じ、自分の言動を選んでいるのか、それは教師と児童生徒との関係性、児童生徒どうしのつながりにどのように影響しているのかを振り返ることで、教師はどのように指導していけばいいのかを具体的に考えていきたい。そこで研究主題を「児童生徒どうしのつながりを育む教育相談的なかかわり」と設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法

まず、指導を振り返るためには、指導の中で何が起きているかを教師自身が知る手立てが必要となる。そこで次のような方法を考えた。

- (1) 年間を通して5回の授業研究を行い、さまざまな立場にある研究員それぞれの見方で、「授業中の教師の働きかけ」と「児童生徒どうしのつながり」について見とる。
- (2) 各授業後の研究会議で研究員それぞれが見とったことについて授業者を含めて共有し、児童生徒どうしのつながりをより効果的に育むためのなかかわり方について検討する。
- (3) 各研究員は、検討した内容を各学校に持ち帰り、自身の指導の中で実践する。その様子をビデオに録画したり、TTの授業ではT2の教師に聞き取ったりするなどして指導を振り返り、次の研究会議にて共有する。

¹学習指導要領総則解説「児童自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力」

2 研究の実際

① A中学校における実践 ～特別支援コーディネーターとして生徒をつなぐための土壌づくり～

A中学校ではコーディネーターがT2として授業に入り、T1とともに指導を振り返りながら、生徒を効果的につなぐ声掛けについて検討した。ここではコーディネーターがT2として授業に入る時は次のようなことが重要であることがわかった。

- ◇ それぞれの生徒の情報をきちんと把握し、適切な声掛けや支援ができるようにする。
- ◇ 授業者である教員との信頼関係を築くために、情報を伝える時は相手が受け入れてくれるような伝え方になるように心掛ける。

そこで、コーディネーターとして、次のことを行った。

- ① 各学年の情報が入りやすいよう、職員室の席を真ん中にする。空き時間は可能な限り教員へ声をかけて生徒についての情報を得るようにする。
- ② 朝、電話での欠席連絡をなるべく受ける。長欠ぎみの生徒の保護者の様子、腹痛・頭痛などで欠席・遅刻をする生徒の情報を把握する。
- ③ 担任や授業担当者と情報共有するために、教職員から話しかけられたら、何よりも優先して話を聞く。
- ④ 部活動で生徒に声掛けをする。特に学習や行動面で配慮が必要な生徒には、その生徒ができていることを伝える。「いつも、一番に準備をしているね。」「声が一番出ているね。」など。技術面以外でも褒めることはたくさんあるので、それらを見つけれられるよう、日々の観察を丁寧に行う。
- ⑤ T2として授業に入る際は、一斉授業では「学習支援、生徒の様子の観察、個々に応じた効果的な支援」、グループ活動では「生徒どうしをうまくつなげるための声掛け」を意識する。

以下、特に⑤について、実際の指導の中で見た様子について述べていく。

友人関係でうまくいかず学校への行き渋りがあったA。保護者の協力を得ながら断続的に登校し遅刻早退も多かった。クラスでは一人であることが多く、表情が硬かった。

担任が席替えに配慮し、穏やかな性格である生徒をAの前の席にした。また、面倒見が良く、とても気が利く生徒を隣の席にした。前席と隣席の生徒が彼に積極的に接することで、表情も段々と良くなってきた。そのような中、彼がクラスの一員として居場所を見つける等、大きな変容を見せたきっかけの一つが、教科でのグループ活動だった。4人のグループでの活動だったのだが、今までAとそれほどかかわりがなかったメンバーで構成されていた。全員が協力して創作する活動で、4人に明確に役割が与えられていた。上手に表現するための工夫について話し合い、そのプロセスの中で失敗しては共に笑い合いながら活動を進めることで、メンバーにつながりができてきた。Aが笑っている表情は久しぶりに見たので、授業が終わった後すぐに担任に報告した。担任もこの話を保護者に伝えた。保護者も安心したようだった。この後、Aはクラスに居場所を見つけ、安心して教室にいられるようになったように見える。生徒どうしのかかわりを生みやすい授業形態とその後の本人、保護者への声掛けで、Aの自信を育み、つながろうとする意欲を生んだ例である。

心を閉ざしている時には、周りはずべて敵とってしまうこともある。そう思っている時には友達をつくることもできない。しかし、そこに授業があり、取り組むべき課題があり、その達成に向けて友達と協同する活動があり、その活動が充実することは、教科のねらいを達成するだけでなく、生徒どうしを結びつけることになる。友達との関係づくりが苦手なAであったが、授業者がそのことに気付き、授業の中でも配慮をしていく。授業の中での教育相談的なかかわりが生きた授業であった。このような素敵なエピソードを見つけると、教師も心が穏やかになる。T2として授業に入る際には、素敵な場面をひとつでも多く見つけ、授業者に返していきたい。

② B中学校における実践 ～生徒と生徒をつなぐ教育相談～

B中学校では指導の経過を逐語録としてまとめることで振り返りを行った。指導中に録音をするわけにはいかないの、思い出す形での逐語録となったが、読み返すと次の指導に生きてくる情報を得ることができた。以下、振り返りで得た情報をもとに教師（T）が教育相談的なかかわりをする中で、配慮の必要な2人の生徒が、自身の力を発揮し、支援の必要なく学校生活を送ることができるようになった事例について述べていく。

【A2年生】

苦手とするCに、よくからかわれて泣きながら相談してきた。できないことも多く、自己肯定感も低い。体育祭の学年種目で大失敗してトラウマになる。いろいろなアドバイスをしながら少しずつ強くなってきた。Cへの接し方について、「徐々に自分の意思表示をしよう」「嫌な時は嫌と言おう」とアドバイスして少しずつ恐怖心を克服してきたが、苦手なことは避ける傾向がある。

【B1年生】

体育祭の盛り上がりについていけず、孤独感を感じる。教室で我慢できず泣いてしまうこともあり、担任、学年職員で話を聞いたり家に送り届けたりした。4月下旬の授業中、急に「友達がいなくて死にたい。寂しい。」と泣く。職員全体で注意してみていくことを確認した。

生徒指導担当及び特別支援教育コーディネーターとして、A、Bに対して別々に相談にのっていた。相談の内容を逐語録にしてみると、2人には共通して「些細な出来事で過剰に心配してしまい、落ち込んでしまう」という傾向があることがわかった。大人とのかかわりだけでなく、同年代の生徒とのかかわりを通した社会性の育ちを期待して、学年も違うその生徒を昼休みに呼び、私を交えて3人で話をする機会を作った。

【6月初旬 昼休み A、Bを呼び出し顔合わせ】

6月初旬、昼休みにA、Bを呼び、顔合わせ。

T：実はね、2人に紹介したい人がいるんだ。AもBも先生が相談にのっていたよね。二人の悩みが似ているかなと思って。お互いにアドバイスしたりできたらいいかなと思って呼んだんだ。

AB：よろしくね

T：体育祭のことが、不安だったって共通点があるよ。

A：（去年の経験を語り2年生になったらなんとか平気だったことなど話す。）

T：あとね、Cがちょっと怖いとかってところも共通の悩みかな。

A：（Cのふるまいに対し、先生のアドバイスできっぱり意思表示をできるようになった自分の経験を得意気に話す。）

T：でもさ、Cもけっこういいところあるじゃん。

A：虫に詳しい、これ一緒に見ようとか誘ってくれる。今年はあまり暴れない。

T：だって。

B：そうなんだ。

T：まあ、同学年じゃなく先輩だからきっぱり言うのは難しいかもしれないけどね。

A：まあ、困ったら僕の教室に来ていいよ。

B：ありがとうございます！

T：これから廊下で会ったら『やあ』って言えるね！

その後、A、Bが共に遊んだり話をしたりと、時間を共有することが増える。徐々に自分の感じている悩みを話題することも出てきた。

【6月中旬 昼休み Aが教室に来る】

A：先生、今日Bと遊べるかなあ。

T：どうかな。でも今日は先生が担任の代わりに学級にいないといけないから一緒には行けないんだ。誘いに行ってみたら？

A：うん（一人じゃ行けないかと思ったが・・・）

A：（戻ってきて・・・）先生、Bね、教室で友達と楽しそうに話をしていたからやめた。

T：そうか、それは残念というか、でもBにとってはいいことだね。

A：（お兄さん風な表情でピースをしてうれしそうに）うん、そうだね。

【別日】

T：昼休み、久しぶりにサポート級で百人一首やろうか？Cも誘って。

A：いいよ。でもまずBが元気かどうか昼休みのクラスの様子見に行ってきていい？

T：よろしく頼む！

A：（戻ってきて…）先生、Bは友達と楽しそうに過ごしていたから大丈夫だよ！

その後、7月下旬に学級で百人一首を行った。A、B、Cが共に仲良くできた。Cからも「さすが〜」「そっちが早かったからあげる」など温かい会話も多く和やかにできた。

A、Bは、他者には優しく、マイナス思考に陥りやすいという共通点を感じたのか、初対面の日から、安心して雑談できる雰囲気はできていた。定期的に3人で話す中で、次第に互いにアドバイスをし合えるようになった。そして、上級生であるAが、下級生であるBが元気に生活しているか見てきて、私に報告してくれるようになった。仲間の心配をして報告することで、自分の活躍の場を実感できたようである。Bも、その後は同じ学年の不登校傾向になりつつある生徒と共に登校するなど、さらに弱い立場の仲間を気遣うことができるところまで成長できた。

担任と生徒との教育相談を、生徒と生徒をつなぐ教育相談にすることで、自分の活躍の場や役割を感じ、登校への意欲にもつながった事例だといえる。昼休みに行ってきた3人での「教育相談」ならぬ「お話しする会」が自然に消滅していったのは、嬉しいことである。

③ C小学校における実践 ～つながりを意識して授業を振り返る～

C中学校では普段の授業をビデオで録画することで振り返りを行った。撮影したビデオを「子どもどうしのつながり」を意識してみると、「この子はこんなに何度も友達を気にかけて声をかけたり手伝ったりしていたのだな」「この子は自分から声をかけて一緒に考えながら取り組んだのだな」とそれぞれの子の他者とのかわり方が見えてきた。特に、年度の初めの時期には、子の振り返りは大変有効で、児童理解が深まり、今後の支援を考えるヒントになった。

誰がどこに気持ちを向けているか、関心を示しているのかを見とることは大切だ。班で話し合ったり活動したりしている時間は、全体的に活発に学習に向かっているように感じる。しかしよく見ると、同じ班の中で話している子とそれを聞くだけの子がいたり、一人違う行動をしているが、時々班の子たちに気持ちを向ける姿があったりする。そんな時が教師の声掛けのタイミングだ。

「困っていることはないかな」「〇〇さんはどう」「一緒に聞いてごらん」など場面と子どもに合わせて教師が働きかけることが必要な時もある。

映像で振り返ってみると、何度も後ろを向いて一緒に確認したそうな子がいるのに、後ろの子は全く気に留めず一人で作業をしている場面があった。ここで授業者が一言声をかけていたら、この二人はつながることができ、二人とも安心して学習への意欲が増したのであろう。友達に声をかけられて一緒に活動を始めた途端に笑顔になったという場面もあった。変化の瞬間とそのきっかけを見つけることは、子どもどうしをつなぐヒントにもなると感じた。

集団に入ることによる不安を抱える子に付き添うと、学級全体で授業をしている場面では進んで手を挙げて活躍するのに、グループで活動をしている時にはうまく関われないことが多いと感じることがある。周りの子は他の子に聞こえるような声で「～になった」「～もやってみた」などと言うのに対して、その子は、視線を向けるけれども声を出さずに課題に取り組んでいる。友達が試しているのを見て、自分も試し始める。他の児童が、黙って取り組むその子に視線を向け、かかわりを生み出すことができるよう教師は働きかけていくことが重要である。

振り返る中で、子どもの様子が見えると同時に、授業者の働きかけのどこで変化が起こったのかも明確になってくる。そうしてわかったことを共有するためにも、ビデオ映像は有効である。自分で振り返るだけでなく、映像を他の教員と共有し、小さな研修会を気軽にできるような雰囲気づくりをしていきたい。

④ D小学校における実践 ～つながりを育てる可能性～

D小学校では、研究員が授業を見ることで振り返りを行った。実際の場面をいろいろな方向から複数の目で見ること、ビデオなどとは違い、その場の臨場感を感じられる振り返りを行うことができた。以下が実際の場面である。

課題について、グループでBと話し合っている際に、Aは表を用いた考え方が十分理解できていない様子であった。またノートに隠すしぐさから、算数に対する自信のなさも見えた。

その後、3つの考えが児童によって板書された。板書から分かることは何か、授業者は全体に問い、Cを指名した。Cは算数を苦手とするが、図1と図2の関連に気づき、そのことをみんなに伝えた。授業者の「算数の苦手なCに活躍の機会を与えたい」との思いからの支援だった。その後、授業者は「ここからどんなことが分かる？」とCに問うた。自分が気づいたことを伝え終わっているCにとって、授業者の意図は届かず戸惑った。授業者はCに答えを言ってほしいと思ったようだ。そこに手助けをしたのがAである。挙手をして課題の答えを発言し、Cの窮地を救った。

この場面から見える、「つながりを育てる可能性」について考えてみた。まずは“教材とのつながり”である。次に“人とのつながり”、そして“自分とのつながり”である。

Cは、図1と図2の関連には気づけているが、はっきりと言語化するには至っていない。そのことに授業者が気づければ、「図1と図2が同じことを表していると気づいたんだね。いいことに気づいたね。では図1と図2の違いは何だろうね？」と問うことができる。Cが言語化できていない部分を授業者が補佐することで、Cの自己理解が深まる。その際にコメント²を入れることができれば、算数を苦手とするCの自信につながる。これは“自分とのつながり”である。

課題:ホットドッグを作ります。パンは1袋に4本、ソーセージは1袋に3本入っています。ソーセージもパンも余らないように作るには、それぞれ何袋ずつ買えばいいでしょう。

【グループの場で】

A: え? どういうこと? (と言ってBのノートをのぞき込む)
B: こうやって書いて、丸をつける。一番低いのが「12」

1	2	3	4	5	6	7	8
4	8	12	16	20	24	28	32
3	6	9	12	15	18	21	24

A: 一番低いのはこれじゃん(1を指す)

B: ちがうちがう、これ、袋の数

A: で?

B: パン3袋、ソーセージ4袋買えばいい

A: おれ、これ、30までやった。3×10=30

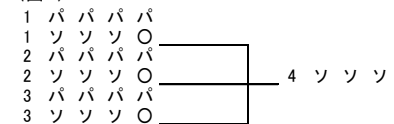
(Bがノートを見ようとするとノートを隠す)

【板書】

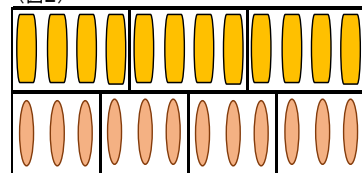
(表1)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
4	8	12	16	20	24	28	32	36	40
3	6	9	12	15	18	21	24	27	30

(図1)



(図2)



【全体の場で】

T: 板書を見て、気づいたことがある人?

C: (図1の)パ/パ/パ/パが(図2の) で、(図1の)ソ/ソ/ソが(図2の) になっている。

T: ここからどんなことが分かる?

C: ええと...

T: みんなに聞いてごらん。

C: ...

T: Cさんは何に困っているんだと思う?

A: ソーセージの袋を4つ買うと12個で、

パンの袋を3つ買うと12個だから余らない。

T: Cさん、つまり余らないように作るには

それぞれ何袋?

C: パン3袋、ソーセージ4袋

² ほめ言葉。賛辞。「デジタル大辞泉」(小学館)

Aの発言に注目してみると、観察していた研究員の目には、Aは、Cが困っていることを感じ取り、それを助けようとしているように映った。もしそこでコンプリメントを入れることができたならCの自信とやる気を育てることにつながり、Cの“人とのつながり”を育てることになる。また、Cの発言は、Aの発言のどことどうつながっているのかを授業者が問い直すことで、Aの気づきをより明確にし、理解を深めることができる。“教材とのつながり”である。それをC、Aだけではなく、学級全体に問い直すことで、学級の他の子どもとC、Aをつなぐことにもなるだろう。“人とのつながり”と“教材とのつながり”が同時に育まれることになる。

図1、図2の共通点や相違点に焦点を当てると、表1との関連にも気づけるだろう。すると、表を使って思考することに慣れていないA、Cも自分の考えたことと表1との関連に気づくことができる。“自分とのつながり” “教材とのつながり”が深まる可能性がある。

授業の中では、“教材とのつながり” “人とのつながり” “自分とのつながり”が重層的に、同時に起こってくる。授業者が、子どもの発言、しぐさや態度をよく見てよく耳を傾けて、それらのつながりを意識することで、それらを育てることができると思う。

Ⅲ 研究のまとめ

教師は授業も含め普段の児童生徒の姿から多くを見とっている。しかし、今回T2や逐語録、ビデオや研究授業を通して、その姿を振り返ると、児童生徒どうしのつながりを育むための教育的なかわりについて、多くのヒントを得ることができた。

児童生徒を見とる時、“教材とのつながり” “人とのつながり” “自分とのつながり”という3つの視点を意識すると、児童生徒どうしがつながっていく。学習指導要領には「あらゆる他者と価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら」とあるが、他者の存在は児童生徒が自分を構築していくために不可欠である。児童生徒は他者とのかわりを通して考えを広げたり深めたりしていく。他者と共に他者の中で成長していく。教師が答えを言うより、児童生徒どうしをつなげて答えを出させた方がずっと学習効果が上がるだろう。

教師は児童生徒どうしの関係性を見とり、つなげる声かけをする必要がある。一見仲良くグループで活動しているように見える場合も、そこで何が起きているか、その意味は何かをよく見る必要がある。児童生徒は、言葉はもちろん表情やしぐさなどで多くのことを発信している。それらの発信を的確に受け止める教師の力を育むには、振り返りが重要である。振り返ると、授業中よく見ていたつもりでも、気づかなかった子どもの素敵な表情や優しいかわり方を見つけ、どんなきっかけで関係性が生まれたかを見ることができる。また、児童生徒は指導をしている教師自身のかかわり方をモデルとして自らのかかわり方を学んでいる部分がある。児童生徒にとって教師は教科を教えてくれる人であると同時に、生き方を示してくれる身近な大人ともなっている。まずは、どんなに注意深く、背景にあることも含めて見とっていても、全て見えているわけではないということを理解し、教育相談的なかわりをすすめていくと同時に、定期的に自分の指導場面を振り返り、その先の指導に生かしていくことが重要である。ビデオなどでの振り返りは気恥ずかしいが、児童生徒のつながりを育むため、自分一人でなく、複数人で、気軽に楽しく前向きに振り返っていきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、研究員所属校の校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。